
影

悠風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影

【Zコード】

Z9014C

【作者名】

悠風

【あらすじ】

どこのでもいそうでどこにもいなさそうな男子高校生の期末テスト前日。テスト直前になつて慌ててテスト勉強する人、クラスに一人はいますよね。

ひつくひつくと喉を引き攣らせながらしゃがみ込んで泣いていた子供の背に人の形をした影が映つた。

「ねえ、きみ、なんで泣いてるの？」

小さく肩を震わせる子供は問いかける声に気付いていないのか、縮こまつたまま泣き続ける。

子供の背に映つた影の頭が不思議そうに傾いた。

「ねえ」

泣いている子供を覆うほどに大きくなつた影は片方の足を持ち上げた。

「ねえつて言つてんじやん」

丸まつた背中を思い切り蹴り飛ばした影は仁王立ちをして砂場に転がつた子供を見る。突然のことには涙が止まつてしまつた子供は呆気にとられた顔で影を作つている人物を見上げる。

「……なんだ、泣いてないじやん。うそなき上手だね」

呆然と見上げたそこには、子供と同じくらいの男の子が立つていた。男の子は無表情で子供の顔を見ている。しばらくの沈黙のあと、子供が言つた。

「だれ？」

男の子は即座に突つ込んだ。

「いや、そつち？」

いきなり何をするんだつて怒るか、砂だらけになつた自分を見て泣くか。普通はどうちかだと思うんだけど。

「あーあ、あの頃の春はすっげー可愛かったのに」

大げさにため息をついた少年は隣でコーヒー牛乳を飲みながら教科書を読んでいる少年の左耳を引っ張った。

「いつ!? 耳、耳引っ張んな、千切れる! 千切れるつて…ちょ…、
冬海つ!」

せいせいと肩で息をしながら耳を左手で隠した少年 春は、半分泣きそうになりながら耳を引っ張った少年、冬海を睨みつける。飲みかけのコーヒー牛乳が床に落ち茶色の水溜りを作っていたが、そんなことを気にしてなんかいられないとばかりに耳を隠している手と反対の手に握り締めていた教科書を広げ始める。

明日はもう期末テストなのだ。

ぶつぶつと数式を呟き始めた春を見て面白くないと言わんばかりに目を細めた冬海は春の髪を引っ張つて遊ぶ。春は眉間に皺を寄せながらもそれを無視していた。

けれど、だんだんと力の強くなつてゆくそれに我慢しきれなくなつたのか教科書の方を向いていた顔を上げた。

ぶち。

「……ぶち?」

「あ、髪取れた」

冬海の握られた手のひらの中に、束になつた髪が納まつている。ひくりと頬を引き攣らせた春は恐る恐る自分の頭に手を乗せて、確かめるように動かしてゆく。どこも禿げていないので何度も何度も確認して、がくりと頭を力なく頃垂れさせた。

「お前…」の歳で禿げたらどうしてくれるんだよ

疲れたように言う春の姿を見て目を丸く　とはいえ、長い付き合いである春しかわからない程度の変化だが、一応そんな反応をした冬海は一人頷いて握った手のひらの親指を立てた。

「俺が貰つてやるから安心しろ」

「いや、男だから。俺たち男同士だから。つーかそういうのはいつも告白してくる女の子たちに言ってあげれば良いんじゃねーの？」
そう。冬海は無表情のくせに女子に人気があるのだ。いやむしろそれが良いらしいのだ。

そういう女子の会話を聞くたびに春は、無表情つてそんなに格好いいのか？とか、トランプのばばぬきをやるときは得だよな、とか思つてしまつ。

だがそれと同時に春は思い出す。

実際は、冬海つて別に無表情じやないよなあと。

それがわかつたのは自分達が知り合つて一緒に遊ぶようになつた数日後のことだつたのだけれど。

* * * * *

春はこの町に引っ越してきたばかりで友達がいなかつた。そのうえ極度な人見知りだつた所為もあり、同じ年くらいの子供の輪の中に入つていくことが出来ずになつた。

公園に行つても一人でブランコをして、日が暮れたら帰る。それの繰り返し。

寂しかつたけれど家に帰つたら自営業をしているお父さんたちの邪魔になつてしまつ。お父さんもお母さんも仕事で忙しいのに、自分の所為で余計なことに時間を費やさせることは嫌だつた。

それに春はわかっていた。

仕事が早く終われば早い分だけ自分と遊んでくれる時間が長くなる

ことを。

「春」

でも、そう思っていたのは数日前のこと。

今はもう友達が出来たから寂しくなんてなかつた。

「一冬海くん、今日は何して遊ぶの？」

にぱつと花が咲くように笑つた春は冬海の元へと駆け寄る。無表情で春の手を握つた冬海はそのまま、公園の奥の方にある大きな木の前まで歩いた。

まだ小さい二人が見上げたその木は驚くほど大きくて、だからその木のてつぺんまで行けたらどんなに美しい景色が広がつているんだろうと興味を持つてしまつた。

子供は興味があると何でもそれを実行しようとする。
だから今回も、そうだつた。

小さい手のひらを木の凹凸に上手く引っ掛け^{おうとつ}ては少しずつ少しずつ上に登つてゆく。運動神経の良い冬海は既に数本にわかれた枝の内の一本に腰掛けて春を待つていた。

上手く凹凸に引っ掛けながらなかつた春の足が滑つて膝に擦り傷を作る。突然走つた痛みに驚いて春の手から力が抜けた。

「春つ！？」

上方から冬海の叫び声が聞こえる。一瞬の浮遊感。

落ちていることより、膝の傷より、傷だらけで血だらけの手のひらより、大変なことだつた。

春にとつてそれは、何よりも大変だと思つてしまつことだつた。

冬海くんを、泣かせちゃつた 。

背中を襲つた激しい痛みで遠のいた意識の中、春は呟いた。

「…………ん、しゅんつ、起きてよ、春ツ！」

悲痛な叫びに春は田を覚ました。

田の前にまお父さんとお母さんと、知らないおじさんとおばさん、それとまろ涙を零す冬海がいた。

「おと、や…おかあ、や…ぼく…？」

ぼんやりとする頭で春は必死に記憶を辿っていた春は、足を滑らせて怪我をしたこととそれに驚いて木から手を離してしまったこと、そしてその所為で冬海を泣かせてしまったことを思い出した。

「どうみ、くん…？」

不思議そうに春が冬海の名前を呼ぶ。

震える手で春の手を握る冬海の真っ赤になってしまった目があまりにも痛々しかった。

「ごめんっ、ごめんね。俺が、あんなこと言わなかつたら…っ、木登りしようつなんて、言わなかつたら…っ、」

春は怪我なんてしなかつたの。

泣いている所為でつつかえつつかえになってしまったその言葉。いつも無表情で転んでも泣かなくて、凄く格好良いと思つていた冬海の泣きながらの懺悔。

春はそれに怒ることも悲しむこともなく、ただ田を丸くして答える。「別に冬海くんは悪くないよ? だつて怪我しちやつたのは、ぼくが足滑らしちやつたからだし、ぼくだって木に登りたかったんだもん。えーっと…もう…じきよつじえる、だよ。」

最後にわけのわからない単語を叫んで笑つた春を見て、今まで泣いていた冬海もつられて笑つた。

「それを言つなら自業自得でしょ
もちろん突つ込むこともされず！」

「ああ、自分の頭の悪さはあのときからだつたのか。

思い出して少し空むなしくなる。またか自業自得を読み間違えた挙句、それを堂々と親や冬海、それに冬海のおじさんたちの前で叫んでいただなんて恥ずかしくて堪たまらない。

「あー…冬海おまえが忘れてて良かつたー」

憶えていたらどんな風にからかわれていたことか。考えるだけで背筋に悪寒が走る。

「ん? 何を?」

突然覗き込んできた顔に驚いて後ろにあつた壁に頭をぶつけたけれど、地味に痛むけれど、多少涙目になりながら春は答えた。

「なんでもない

「なんでもないわけないだろ」

両頬を左右に引っ張られる。

「べ、別に…ちょっと昔のこと思い出してただけ」

納得したのか諦めたのか冬海は手を離した。赤くなつた頬がやはり痛かった。

「もう日が暮れるね」

赤く染まり始めた空を見て冬海は目を細める。一この空を見るといつも思い出してしまう。

自分の所為で隣にいる大切な友人を傷つけてしまつた幼い頃のこと。あの日、木登りをしようと誘つた所為で木から滑り落ちた春が地面に転がつていた石で頭を切つて氣を失つてしまつたこと。

そのときに頭から止とめ処なく溢れてくる真つ赤な血にびじつたら良いのかわからず泣くしか出来なかつたこと。

病院で意識を取り戻した春が笑いながら「これは自業自得なんだと言おつとして言い間違えたこと。

「もうこんな時間か…て、え!? 僕テスト勉強出来てないっ

慌てふためく春を見て嬉しそうに微笑んだ冬海は大げさにため息を

ついて言った。

「仕方ないなあ。おばかな春の為に俺が一肌脱いでやるとしよう」
大きく目を見開いた春は冬海の手を握つて腕がもげそうなほど激しく上下に振つた。

「ほんとか!? お前、勉強しないくせに頭良いもんなつーよつしや、今日は徹夜だ」

歯を剥き出しにして本当に嬉しそうに笑つた春は悪戯なくさり気なく結構酷いことを言つた。

勉強をしないで頭が良くなるわけがないだろつ。いつも見えてる冬海は毎日二つひとつと勉強をしているのだ。

「そういうや久しづりだよな、お前ん家行くの。^ちおばさんの料理美味しいし、楽しみだなー」

「お前自分が勉強しに来るのわかつてるか? ゼつてーわかつてねーだろ」

夕日に染まつた空が長く長く繋がつた一人の影を見ていた。
かもしだれない。

(後書き)

初めて投稿した短編小説です。

最近書いてるものが全部暗くなってしまってるので、少し(?)明るい話を書いてみました。

ちゃんと明るい話になってるかどうか、よろしければ教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9014c/>

影

2010年12月18日15時04分発行